埼玉工大研究紀要

教育をどうするか

渡辺美知夫

この間偶々テレビのボタンを押したら、お腹がいい恰好にふくらんだ若い奥さん達が、自分のお腹に向かって熱心に話しかけているシーンが現われました。語学のレッスンを始めている人もあり、算数のエクササイズに励んでいる人もいたようです。つまり現代版の胎教というわけです。教育熱心もここまで来たかと唸らされました。私の見た限りでは、これらの若いママさん達の教え込もうとしていた科目は、どうやら将来高校や大学の受験にそのまま役立ちそうなものばかりであったように思われます。立身出世のための機能教育という印象を強く受けました。ここにも現代の世相がありありと反映しているな、という気がしました。

むかしは胎教というと、聖賢の教えを学んだり、有難い法話に耳を傾けたり、要するに倫理的、宗教的な、生き方の基本に関する効果を願ったものであったと思います。機能教育ではなく、実存教育が主眼であったように思うのです。

機能教育と実存教育と、どちらを重しとするかとなると、これは世界観、人生観の問題に係わって来ます。この辺りの問題をあらかじめキチンと思い定めてかからないと、胎内の大事な赤ちゃんが大迷惑をしたり、場合によってはとんだ犠牲になりかねないでしょう。

現代日本のサラリーマンの大半は、朝早くから満員電車に詰め込まれて、一時間もそれ以上もかかって職場に急ぎ、夜はお付合いと称して深夜まで、カラオケ付きの飲食をし、いわゆる「午前さま」になって御帰舘、土、日にはこれまたお付合いのゴルフに精根を使い果たしているというのが、一般的なパタンのようです。これでは当人達も随分ストレスが溜まることでしょうが、妻君や家族は尚更のことではないかと思います。最近離婚率が急上昇している原因は、単に女が強くなったからという、只それだけのことではなさそうに思われます。端的に言って、こういう生活様式は一

体まともな人間生活と言えるのでしょうか。これでは機能一点張りで、人間としての生活はどこかに消し飛んでしまっているのではないでしょうか。その証拠にわが国では、人間はそっちのけで、肩書きがモノを言います。肩書きとは、その人間が果たしていることになっている機能の指標に過ぎません。その人間の本質とはまるで関係がないわけです。当のサラリーマン自身も、その辺のことは薄々気付いてはいるのでしょうが、さればと言ってどう仕様もないではないかと観念しているか、場合によってはそれをよいことにして正体をくらましているか、いずれにせよ甚だスッキリしない、灰色で憂鬱な風景が、今日の日本人の暮らしぶりなのではないでしょうか。サラリーマンに限らず、農民も自営業者も、悉くが究極的には鬱然たる欲求不満に閉ざされているというのが、実状のように思われてなりません。日本は豊かになった、金余りだ、世界一だなどと言われても一向その気になれず、心が浮き立たないのもそのせいではないでしょうか。

これはおかしい、これではいけない、なんとかしなければと、みんながハッキリ意識すべき秋が来ているのです。

このような意識転換の最大の障害になっているのが、現代日本の学校教育ではないでしょうか。文部省は江戸幕府よろしく、万事に全国統制を図りたがり、国民一人一人の、また地方の自主性などというものは、テンデ眼中にないようです。権力温存志向の現われです。その結果教師の側にも、児童生徒の側にも、深刻な弊害が続出しています。しかしそれだからと云って、今ここで文部省に向かってその方針を改めろ、意識の百八十度転換を図れなどと言ってみても、オイソレと効果はあがらないでしょう。そこで私の提案は、現在の学校教育をまず搦手から、いわば骨抜きにすることなのです。その具体的方法は教育の主軸を学校教育から通信教育に、教室での教育を家庭での教育に切り換えることです。イキのよい青少年を連日一定時間、しかも一日中の最良の数時間、一定規格の箱に詰め込まなければ、教育はできないものと考えるのをやめることです。教育はいつでもどこでも出来るのだと思い直すことです。それでこそ「生涯教育」と言えるというものです。学ぶことに年齢制限があることの方がおかしいのです。学ぶことは場所を択ばず、時を択ばないことは、われわれ自身体験的に判っているで

はありませんか。一つの学年の生徒の歳がほぼ揃っていることの方が、実は異様なのです。いろんな年齢、いろんな境遇、いろんな条件の男女が、一室に集まって、自発的に、活発に討論する、それが本来の教室風景の筈です。教師が一方的に御託宣を述べて、学生生徒はひたすら眠気と退屈を我慢しているなどという情景は、一日も早く過去の語り草にしたいものです。

ラジオもテレビも、ビデオもパソコンもなかったむかしは、学校という一定の場所へ、学生生徒を呼び集めなければ、教育はできないものと考えられたのも、一応はムリはなかったでしょう。しかし今はちがいます。

オーストラリヤでは、何しろ日本の二十倍もある、広い国土のせいもあって、早くから放送教育が普及していると聞いています。広い地域に点在する各家庭で、子供達はラジオやテレビを利用して、自主的に勉強しているそうです。学校と家庭が情報メディアを通じて協同しているわけで、これなら登校拒否も起こりようがないし、親と子のコミュニケーションも、自然に成立するというものです。通学というものが日常的には無くなることになれば、交通機関の混雑緩和にも貢献できることになります。日本でもすでに学習塾が、衛星を使った綜合授業を計画しているというではありませんか。ニューヨーク郊外の中学校で、日本人の親が「うちの子には宿題は出さないでほしい。塾の勉強が大変なんだから。」と言ったというので、中学当局が激怒したという記事が新聞に出ていましたが、これとて中学当局の方が、塾教育に対してもっと寛容になり、むしろそちらを本体とすることを、試しに考えてみる位の、発想の色直しをしてみてはどうかというのが私の感想です。旧態依然たるあたまで、むやみに腹を立てるのは、どうかと思います。教育というものは、「学校」という施設でするのが本命という思い込みが、もう現事態に合わなくなっているのだということを、ハッキリ認識すべきです。

パソコンを採り入れた教育も、これからどんどん普及して行くのが自然の勢いでしょう。そうなればパソコンはなにも学校の教室にばかり備え付ける必要はないわけで、自宅でできる範囲の学習は、自宅に備えたパソコンで済ませればよいわけです。個別指導もこの方法の方が効果的にできるというデータも、すでに出ているようですから、嫌いな科目の解消にも役立つこ

と必定です。学校教育の荒廃を只嘆いてばかりいないで、学校そのものの体質変革を図る方が、時代にも合い、発想も多様化され、拡張されるというものです。

近頃折角学校に入学していながら、登校を忌避して、自宅で勝手に勉強して、いわゆる「大検」というのに合格する生徒が、急激に増えているそうです。これも高校当局にとっては苦々しい現象なのかもしれませんが、自主的に勉強して単位をとれば、所期の目的が達せられることの、具体的な証明になっているわけですから、ここはこの現象を虚心に、積極的に肯定して、発展的方向に拡大させた方がよいと思います。つまり通信教育や自宅研修による、単位制の教育が、将来本筋になるであろうことを示唆していると考えた方が、心も軽くなり、建設的でもあると思います。単位制を全般的に採用することによって、従来の学年制による、短期間にムリヤリ所定の科目の履習を終らせる、あるいは終らせたことにする方法が改まると、温情点とやら情実点とやらの問題もなくなり、単位認定の方法さえ妥当なものになれば、従来より遙かに公正な結果が得られることになるでしょう。人それぞれに生活のテンポも条件も、記憶力も理解力も違うのですし、呑み込みの早いのが必ずしも長所とばかりは言えないわけですから、ある単位を習得するのに、一年かかろうが三年かかろうが、要は結論において習得さえできれば、それでよいわけです。

こういうことになると、学校の権威、教師の権威などというものは、片端から総崩れという感じがするかもしれませんが、大体権威主義などというものは、世界の過去数千年の歴史を顧みれば、この際断然廃棄すべき、過去の遺物に過ぎない筈ですから、学校当局も教師も、この際一歩も二歩も退って、学生生徒の身になって、熟考、三省するのが必須の方途であると思います。

私は本稿中で「勉強」という言葉を、すでに何回か使いました。しかし私にとって何がきらいと言って、「勉強」という言葉ほど気に入らないものはありません。大体「勉めて強いて」することにロクなものはないし、効果も上がらないではありませんか。ベンキョウは勉めて強いてするものだという風潮の背後に、私は儒教的権威主義の臭いを嗅ぎとるのですが、どうでしょうか。もとより儒教にも優れた面の多々あること、日本の文化がその影響を深く受けていることを、

重々承知の上で言うのです。とは言うものの、さてそれなら勉強という語に代わる同意語はとなると、ハタと当惑します。「学ぶ」「学習する」「学問する」も確かに同意語ではあるでしょうが、「ベンキョウ」とはまるで語感が、用法が違います。ということは「勉強」という語が断然優勢で、他に適当な語彙を生む余地を残さなかった、つまりベンキョウは勉めて強いてするのが当然で、ほかに考えようはないという、社会的雰囲気があったし、それしかなかったということになるのでしょう。教育行政の統制主義、強圧主義が抜きがたくなったのも、自然の歴史的成行きであったのかもしれません。

モノは統制によって処理する方が、有無相通ずるのに好都合でしょうが、ココロは絶対に自由でなければなりません。ココロは統制を排除します。半世紀前の軍国主義時代はもとより、現在のいわゆる社会主義国の状況などを見ても、そのことは明瞭です。権力者が民衆のココロを統制するところに、人間の真の幸福はあり得ません。いかに立派なことでも、他律的に強制されては、真価を発揮することは、どういうわけか決してできないのです。ココロには常に必ず自主性が不可欠です。本来学ぶことは、他律的に、「勉めて強いて」することではない筈です。自主的に、自発的に、喜んで、勇み立ってする筈のもののようです。そういう「勉強」ができたときには、一日中部屋に籠っていても、チャンとおなかが空くという経験は、誰しも身に覚えがあるではありませんか。

明治政府が学校制度をはじめて制定した頃は、一般民衆には就学の習慣はほとんどなかったわけですから、政府は学校に通って勉学すれば、それが立身出世に直接に繋がるのだと、露骨に勧めたもののようです。その余波は今日といえども、残念ながら決して消え去ったわけではありませんが、国民の意識は明治二十年代に比べれば格段に成熟し、進歩した面も出てきています。意識というものは、緩やかなテンポで、しかも行きつ戻りつしながらも、とにかく進化するものです。従って今日のわれわれも、それなりに進化する希望があり、責任があります。旧体制、現体制に金縛りになっていては、進化どころか退化してしまいかねません。

私は最近家の建て替えを始めるハメになり、ここ一年と数カ月、家財を運送会社の倉庫に預かって貰っ

て、仮住まいという経験をしました。昨今漸く元のところに建った家に立戻ることができたのですが、ドッと送り返されてきたガラクタ家財の整理をしているうちに、フト取出した原稿用紙の束の中に、次のような文章が書きさしになっているのを見付けました。「大学教育はこれでよいか」という仮題がついています。二十年以上も前に書き出して、そのままになったもののようです。

『これこれ、そこの四つん這いのひと、男の子というものはね、チャンと二本足で立って歩くもんだ。机の下をくぐったりしないで、用があるなら胸を張って出て行き給え。』

これは現代日本のさる大学の午前八時四十分頃の教室風景である。イヤ味を言ってるのはかく申すぼくである。一般英語の時間である。言われてるのはぼくのいとしい学生の一人なのだが、彼にはぼくのような老いぼれ教師の、古臭いセリフなど、たとえ日本語でもう合点が行かぬらしくて、話しかけられてるのが自分だと判ると、一瞬こちらの勧告通り二本足で起ち上りはしたものの、キョトンとした顔付きでまわりの同窓の顧をいくつか見廻した後、意を決したという風で、脱兎の勢いで跳び出して行った。

また別の日のこと、ぼくはいささか遅刻をして、廊下を急ぎ足で教室を目ざして行くと、矢庭にわきのドアから屈強な学生服の紳士が跳び出してきて、アッという間に反対側の壁へスッ飛ばされた。彼が跳び出してきた教室からは、先生が点呼をとる声と、学生のハイ、ハイ、返事する声がきこえていた。

これでお察し頂けるように、この大学では、授業のはじめに出席をとると、そのあと必ず数名の紳士が逃げ出すのである。彼等はつまり、教室に留まるのが堪え難いほど、何か外にしたいことがあるらしいのであるが、一学期にある一定回数出席したことにならないと、受験資格を失うので、いわゆる代返のほかにこういう手も使われるということらしい。

こういう連中は試験をすると、往々全くの白紙をシャアシャアと提出するが、自分の名前だけは間違いなく書いてあって、そのわきに所属のスポーツクラブ名がお添えものになっていることが多い。そして学年末になると、ワザワザぼく風情の自宅を探しあてて訪ねてきてくれる。御要件を伺うと、一緒について来た別の人物が（例えば）、「ぼくはボクシング部のマネジャーです」と名乗る。こんどはこちらがキョトンとすると、「この人は先生の試験に失敗したらしいんですが、及第してくれないとボクシング部として大変困るので、なんとかよろしく頼みます」てなことに

なる。つきましてはと、うしろ手に隠していた（例えば）灘の生一本を突き出すこともある。そこでぼくは、ぼくの担当は英語であって、試験にも英語の問題を出したのであること、英語とボクシングとはこの際別に相関関係はないと思うこと、酒は残念ながらぼくはトント不調法であることなどを、ルル開陳に及ぶことになる。

こういう例が毎年一人や二人、いや五人や八人ではないのである。そしてこういう種類の学生が、いつとはなしに（例えば）ボクシング学士としてではなく、経済学士とか法学士とかいう肩書きを貰って卒業して行くらしいのである。イヤ、ナニ、陳情攻勢などというものは、ほかにもっと悪質且大仕掛けなのが堂々と横行してるのだから、学生のすることなどいっそ純真で可愛いではないかと、軽くイナしておけばよいのだろうか。

それにぼくにとって、なんとも不愉快で我慢のならぬことがもう一つある。カンニングである。定期試験のときは、特に時間割を組み替えて、教師は専任非常勤を問わず総動員し、事務職員まで手分けして監督し、替玉防止策としては学生証による首実験までやる騒ぎなのだが、それでもこの悪習は一向に跡を絶たない。なかには随分手の込んだことをする者もあって、これほど頭を使い手間をかけるのなら、いっそそのエネルギーをまともな勉強の方へ向けたらよさそうなものと思われる場合さえあるが、そこまで行くとこれはもう一種の競技かレクリエーションになっているのかもしれない。

文章はここで終って、そのまま未使用の原稿用紙の中に紛れこんでしまったもののようです。私がこの作文を書きさしにして、完結させなかった理由は、今にして思えばその当時の私は、こうした現象を困ったものだと思ってはいたものの、何とか打開の方法はと思い患うばかりで、妙案が一向に思い浮かばず、そのために書き始めた文章を途中で投げ出したものとしか考えられません。

今日のラジオやテレビには、放送大学も開講されてすでに年を経ていますし、高校講座もあり、中学向けの番組も反復放送されています。私は仮住まいのこの一年余り、それらの番組や民放の番組なども自分なりに組合わせて、ビデオなどもフルに利用して、神妙に聴講してみました。自宅研修を自ら体験してみようとしたのです。その結果学校離れは必ずしも悪弊とばかりは言えないという自信を持ちました。放送教育や通信教育の仕組や方法の改良に努めれば、学生生徒一人一人が独自のスケジュールを組んで、自宅学習をして

も、何等差障りは起こらないと考えるようになったわけです。

こういう案に対しては、主として学校側つまりは教師の側から、そんなやり方では集団訓練ができないではないかという、強硬な反論があるだろうことは、当然予感されます。これとて現状では子供達は学校での学習あるいは訓練以外に、大ていの子供が一種類以上の習いごとに通っていることでもあり、学校での生活がそれだけで必ずしも十分な団体訓練の成果を伴ってはいないのではないかという気がするのですが、それは兎も角、学習には教師と生徒、生徒相互間の触れあいが大切であり、欠くことのできない要素であることは、言うまでもないことです。現に行われている通信教育にも、一定期間のスクーリングが必修条件になっているわけで、将来自宅学習や通信教育が主流となる時代が来ても、スクーリングは是非必要でしょう。つまり私の言いたいのは、学校はそのスクーリング専用の場になればよいのだということなのです。従来の通信教育の受講者達も、スクーリングに十分な意義を認めていて、普通の学校生活よりも遙かに充実した、緊張感を味わうことができるので、日常生活上、社会生活上の種々の制約を克服して、進んでこれに参加していると聞いています。私にも短期間ながら定時制の夜学で教えた経験もありますが、昼間の労働から来る疲労感や睡魔と闘いながら勉学する生徒達の健気さに心衝たれたものでした。現在普通の学校生活にはこの充実感が甚だしく稀薄になっているのではありませんか。集団訓練にしても、学校に多種多様な同好会活動がある上、一般社会にも青少年を吸収するいろいろなグループができていて、いわゆる正規の学校生活が、浮き上がって来ているように見えます。この際今迄教育の一切合財を、一手に引き受けたつもりでいた学校が、思い切った役割分散に踏み切るべき時でしょう。自分の子供の教育を、万事学校まかせにして置きながら、事あるごとに学校に文句をつけている母親を、チョイチョイ見受けます。こういう無責任な悪弊をなくすためにも、従来の学校制度は改める時期に来ています。それも小手先細工ではなく、基礎概念から洗い直すことです。自主的に、自発的に、つまり自分の意志でした学習の成果を、スクーリングの席に持ち出すようになれば、学習の緊張度も充実度も格段に上るに違いありません。スクーリングの期間は、一年間に数週

間で足るということになれば、現在ある学校の教室の利用効率、回転率もぐんと余裕ができ、流動性を持たせることも盛んになり、巨額の費用をかけて大規模な学校建築をする必要も、ずっと少なくなることでしょう。

こういう方法を採用すれば、人は思い立った時いつでも、また都会にいても田舎住まいでも、自主的に作成した学習スケジュールに従って自宅学習ができるわけですから、わざわざ遠い処へ「遊学」する必要もなくなりますし、スクーリングも全国どこで受けてもよいわけですから、いわゆる「学閥」などというものも自然に消えてなくなるでしょう。又なによりに思えるのは、受験地獄とやらいうものが、ナンセンスになってしまうことです。学校は自主学習のスクーリングの場に過ぎなくなりますから、ある特定の学校に無理をして入学することの意味がなくなってしまう筈だからです。今の社会から受験地獄一つがなくなれば、それだけで世の中どれほど明るく、伸び伸びすることか、想っただけで胸が躍るではありませんか。入学試験がなくなれば、受験生のいる家庭の、あの暗い雰囲気が一掃されます。学校当局は受験料という結構な収入源がなくなって、当座は困るのかもしれませんが、教師の方は大変な苦労と、細心の配慮を強いられる、入学試験問題作成という、空しくて何ともやり切れない負担から解放されます。それに大勢の受験生を、勝手に決めた基準によって選別するなどという、まことに失礼な仕事をせずに済むことになり、その結果「入れてつかわす」式の特権意識、七つの大罪の筆頭に挙げられている「傲慢」の罪を犯さずに済むことになるわけで、志願者が多ければ多いほど、大量の紙がムダになるという、勿体ない現象もついでに消え去りますから、まことに良いことずくめという気がします。教師の品格向上にも貢献するとあっては、断行のはずみがつかなければおかしいというものです。

もう随分むかしのことになりましたが、大学紛争というのが全国的に、いや世界的に流行したことがありました。私も一年ばかり、ある女子大でその嵐に巻きこまれて、体重が八キロ減りましたが、その間数回「釣るし上げ」ということを経験しました。教師一人を教室に閉じこめて、二百人に余る学生が、声高に罵り、糾弾するのです。臆病者の私は初めのうちは怖くて足が震えましたが、ある時一人の学生が「テメーの

ような奴がわれわれの採点をするなどとは怪しからん。」と言い出しました。忽ち同調者が出ました。私は「なるほどボク自身も採点というものには多大の疑問を感じてきた。そんなもの止めろと言うなら、進んで即刻やめてもよい。只しかしボク一人がその気になっても効果がないから、これを教授会の議題にして、決をとる必要がある。そのためには少々時間がかかるが、それは勘弁して貰いたい。それに試験も採点もなくなるとなると、あなた方の評価の手だてがなくなるわけだから、成績表もなくなり、卒業証書なるものも出せなくなるね。」と言った途端、「それは困る。」と大変素直な声が上りました。それを聞いて私はひどく安堵し、足の震えも止まったことでした。学生達は今現体制の不当と矛盾を指摘して、「断乎」起ち上っている筈だが、これでは結局腰砕けだと気が付いたからです。基本的に腰の据わっていない「闘争」は、結局学年末には火が消えたようになり、私をつるし上げた当の学生が、ポツリポツリ私の部屋にやって来て、「わたし達は一体これまで何をして来たんでしょう。」と涙ぐむ始末になりました。私は懸命に彼女らを慰め励ますことになりましたが、私はこうした結末を今も大層残念に思っています。彼女達の腹が本当に据わっていたら、日本の社会も本質的に大きく改革されたことだろうにと思うからです。私が今している提言も、その時すでに実現の緒についていたかもしれないのです。

入学試験がなくなると、学習塾は全滅かというと、そうは思えません。学習塾は民営ですから、生き残るために必死になって自己変革を図るでしょうし、先にも一言触れたように、衛星を使った共通講義を逸早く考え出したりする活力を持っているのですから、優れたスクーリングの組織を作り出すでしょうし、従来の学校の方こそ塾に学ぶべき点が多々あることになるかも知れません。その筋だか当局だかの指令待ちの、ひと頼みでなく、自分の発意ですることには、責任感も伴いますし、何より活力がありますから、世の中が明るくなるというものです。

自主学習が本命となると、自分のペースを守ればよいのですから、いわゆる「ついて行けない」という悩みも消えてなくなります。他律的に、他人が決めたものがあるから、それについて行くとか、行けないとかという問題も起こるでしょうが、自主学習では自分の

ペースで歩くなり走るなりすればよいわけですから、他人の後について行く必要がないわけです。そうなれば当然、落ちこぼれということも起こり得ないことになります。世の中が積極的になり、明朗になれば、いじめなどという陰湿な現象も起こらなくなることでしょう。

こうした意見を私は実は戦前から口にしていて、戦後は幾度か書きものにもしたことがあるのですが、戦前からあった例では、例えば羽仁もと子さんの自由学園が、文部省の認定を受けられないのも覚悟の上で、独自の教育を力強く推進していたと思いますし、戦後には山形県とか福島県とか島根県などに、同様の理念に基づく高校ができて、卒業資格が認められないのを承知の上で、年々父兄の中に賛同者が増えて生徒達も思い思いの学習に積極的に打込んでいる例が出て来ているようです。つまり私などの考えつくことは、心ある人達がすでに実践に移していることなのだということになります。しかし現状ではこの種の学園はまだまだマイノリティーであり、現体制から強い圧力を加えられるのに、必死に抵抗する必要があるようです。本当のことというものは、いつの世にも仲々一般世間の同意が得られにくい例が、ここにもあることになります。前記の学校はすべてが広義のキリスト教主義という共通点を持っているようですが、このような自主学習とキリスト教との間に、果たして必然的な結び付きがあるものなのか、それとも単なる偶然なのかは、別途詳しく考察してみるに価する問題だと思います。とにかく本当のことは、長い目で見れば必ず実現するものだということを信じて、少数ながらすでに見出される実例に励まされながら、分に応じた努力を重ねることが、当面私共のとるべき途であると、私は思っています。

こうした途を択びとると、初めのうちは教師の側にも親達にも、もとより学生生徒自身の方にも種々戸惑いもあるでしょうが、ひとから押しつけられたものに戸惑うのでなく、自主性、自発性を基本にしている方法ですから、自分で自分を矯正し、規制して行くうちに、本当に身についたスケジュールが定まって来ることになるに相違ありません。すべての権利と責任が己れに帰するというのが、本来人間の生き方の基本に外ならないということが、こうして単なる理念でなく、意志的な実践として実を結ぶことになる筈だと思うのです。

（一九八八・一一・一一）